

論文回想

渡辺真紀子

あまり思い起こしたくない学位論文ではあるが、自分ひとりの力で成し遂げたわけではないので、記憶が遠のかないうちに論文作成のエピソードを書き留め、周囲への感謝の意を記す場をここに頂戴します。

昭和62年4月、3年半務めた地理学教室助手を辞め、大学院博士課程に復学(正確には再入学)した。論文の作成期間を2年と決めていたのは、指導教官の浅海重夫先生が退官されるまでの期間が3年であったからという理由だけでなく、それまで給与をもらっていた身から一転して学費を払う身になったことの家族に対する遠慮からでもある。

復学してからの毎日はフィールド調査と土壌分析に追われ、何人もの学部生に分析を手伝ってもらい、フィールドに同行してもらった。他大学の大学院生の協力も大きかった。この頃の教室の実験室はまるで工場のようにスケジュール表にもとづいてフル稼働していた。2年目からは卒論生と修論生の土壌分析も加わって、あの708室は容量オーバーとなり、書棚の向こうの浅海先生にはもはや静かな研究空間はなくなってしまった。

研究の区切りはつけにくいもので、まだまだ調べなければならないことは山ほどあったが、秋の論文提出期限に間に合わせるために7月上旬で分析作業を打ち切った。お茶大に博士課程の大学院ができてから受理された論文数は当時ふた桁になっていたが、地理学科出身者では前例がなく、論文の形式や手続き等ではわからないことが多かった。幸い、他学部出身の大先輩や同輩から、お茶大人間文化研究科の特徴である複数指導教官制による審査、副論文の作成について数々の助言や情報をもらうことができた。この間、浅海先生には手続きについて随分心配をおかけしたことを覚えている。

論文の執筆期間は実質的には3カ月ほどであったが、それまでに学会誌へ投稿し、中間的な報告をしていたので夜を徹しての作業はしないで済んだ。夏の暑い盛り、書き始めたものの、無事提出できるかどうかその可能性は50%と覚悟していた

が、応援してくれている人たちの手前、後には引けないというのがエネルギーの源だったと思う。一番身近で応援してくれたのは当時5歳の娘で、夜もいっしょに寝てあげられず、机の下で私の足をもって眠りにつくことがしばしばあった。ひょっとして一番我慢をさせられているかもしれないのに、娘は「がんばれ」と覚えてたの字と絵を書いてくれた。

健康には自信がある私であるが、さすがに提出の直前には胃と肝機能を悪くし、微熱に悩まされた。論文題目届の提出という一つの関門を突破し、10月14日、何とか体裁を整えて主・副2つの論文を提出することができた。帰りの地下鉄が恵比寿駅を過ぎ、中目黒駅に向かって地上に出てきたとき、あたりはもう暗く、ふと娘のことを思い出し涙があふれてきてしまった。一体何を泣いているのか周りの乗客は不思議だったにちがいない。

この後、私を待ち受けていた2回の論文審査については記憶にとどめたくないことばかりだが、主査をして下さった化学科の曾根興三先生が、分野の違う論文を何とか理解しようと親身になって下さったことにたいへん感謝し、感銘を受けたことはぜひ書いておかなければならない。また東京農工大学の浜田竜之介先生には審査にあたり、片目をつぶっていただいたようなものと察しているが、科学的方法論においては分野を越えて認めることができるものだという先生の有難いお言葉にどんなにか勇気づけられた。地理学、土壌学、化学、物理学、生物学、歴史学の諸分野の先生方による審査での試練で体得したものが、今後の研究の骨組みになるのであろう。

元号も平成に変わり、学位授与式に臨んだ。附属出身者でもないのに微音堂にすわるのはこれで実に7回目であった。私の企てに対して協力こそなかったけれども理解を示してくれた夫がアメリカに留学中であり、同居の両親が健在で支えてくれたという私的な一面を書き添え、この拙文があとに続く方々のお役に立つことを願って結びます。

(中央学院大学)